

目次／テーマ展 大津波と三陸の生き物 表紙／いわて文化ノート「田山  
暦」の周辺、つれづれ p.2-3／展覧会案内 テーマ展「大津波と三陸の生  
き物」 p.4-5／事業報告 第72回自然観察会「夏山で生きもの探し」 p.6  
／活動レポート インターネットを利用した博物館の情報発信・平成28  
年度考古学セミナー p.7／インフォメーション p.8

テーマ展

大津波と三陸の生き物

平成28年12月17日(土)～平成29年2月26日(日)



三陸のリアス海岸 広田半島黒崎から南西方向をのぞむ

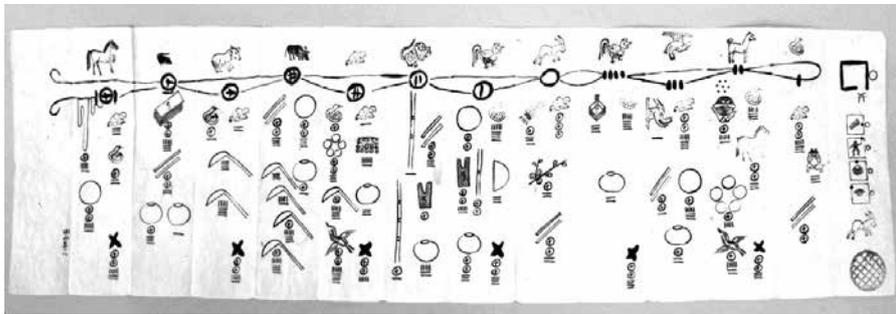
三陸海岸は、昔から繰り返し大きな津波に襲われてきた地域です。小さな半島と湾が連なるリアス海岸の地形が津波の高さを増し、被害を拡大したと言われています。一方、この地形が豊かな海の恵みを私たちに与えてきたことも確かです。

2011年3月11日に、日本史上最大規模の災害である東日本大震災を引き起こした大津波は、三陸の海辺の生き物にどのような影響を与えたのでしょうか。そして、あれから6年近くが経過した今、海辺の生き物はどうなっているのでしょうか。

## ■いわて文化ノート

## 「田山曆」の周辺、つれづれ

学芸第二課長 小野寺 俊彦



田山曆 天明3年 岩手県立博物館蔵

写真は、現存最古といわれる天明3年(1783)の田山曆たやまごよみです。

文字を使わずに絵で表した曆で、現在の八幡平市田山で作られ、江戸時代には南部藩の領地であった鹿角かづの(現在、秋田県)のあたりまで使われていたといわれます。

どうしてこのような曆が作られたのでしょうか。田山曆のことを最初に記したとされる菅江真澄すがえ ますみの旅日記『けふのせはのもの』に、

「このあたりの村にては、ものかくひとまれに、めくら曆とて、春より冬まで一とせの月日の数を形にかいて、田植え、耕の時をしれり」

とあるように、文字を知らない人が多かったからだとされています。橘南谿たちばななんけい、百井塘雨ももい とうう、山片蟋桃やまがた ほんとう、皆そう書いているのだから、おそらく事実そのとおりののだと思います。が、すこし引っかかるものを感じて、ちょっと調べてみました。

## ■おもしろ文化としての曆

江戸時代の曆(旧曆)は、月の満ち欠けに基づく太陰曆を基本にし、曆と季節の誤差を、閏月をいれることによって調整した太陰太陽曆でした。そのため、30日まである大の月と29日までしかない小の月の配列は、平年でざっと100通り、閏年では350通りもあったそうです。つまり、その年の曆を見ない限り、月の大小がわからないのでした。そのため、

江戸時代には絵を見れば月の大小がわかる絵曆(大小曆)などが盛んに作られました。著作権の関係で紙面に載せづらいので、どうぞネットで大小曆を画像検索してみてください。面白い曆がたくさん見つかります。遊び心の発露でしょうか、実用を離れ、数字を絵の中に隠し、浮世絵風の判じ絵にしたり、一筆絵にしたりしたものがたくさんあります。平賀源内や鈴木春信らが中心になって、江戸のあちこちで自慢の絵曆を持ち寄る交換会が開かれたそうです。

そういう背景もあって、橘南谿や菅江真澄などの旅行記でとりあげられると、江戸や上方の文化人を驚かせることになったのが、田山曆だったのです。

田山曆も、実用一点張りではなく、上方や江戸で絵曆(大小曆)の流行や判じ絵あるいは戯作など生み出していったのと同じ類の遊び心の発露だったとは考えられないでしょうか。

## ■田山曆の特徴

江戸の絵曆が月の大小が分かるように作られているのに対し、田山曆のすごいところは、月の大小に加えて、節分や彼岸などの曆注れきちゅうまで絵で表しているところです。たとえば、一月の折面には、お猿さんがお辞儀ごうしんをしている絵で庚申が28日、鬼の絵で節分が3日、一膳の箸の絵で八専のはじめが20日だと表されています。

お彼岸(お団子)や八十八夜(重箱に矢)、入梅(梅の枝)など季節がわかる絵のほか、田植えよし(種壺)とか田刈りよし(鎌)、何をやるにも凶の十方暮れ(バッテン)など、占的な曆注も絵で表されているのです。

## ■江戸で模倣された田山曆

文化が爛熟していた江戸では、曆注も絵で表してしまう田山曆のおもしろさを真似た絵曆が作られていたようです。



田山曆として紹介された「深山曆」(東北大学附属図書館蔵)『時・曆・プラネタリウム』(水野良平)

平成15年に、曆の名が「深山曆」みやまごよみ、作者は「橘隼」きゅうかと記された帯封付の曆が発見されるまでは、子供向け図鑑等で全文字のよめない人のためにつくられた「田山曆」として紹介されていたほどそっくりです(『時・曆・プラネタリウム』水野良平 ポプラ社 1963年)。

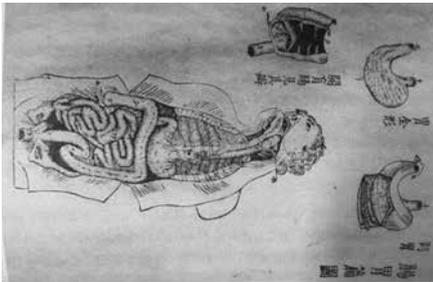
橘隼は、安永から寛政にかけて戯作を続けた市場通笑いちばつうしやうの号であろうとされています。40年にもわたって作られ続けていたらしいので、相当評判がよかったのでしょう。今では、「好事家が新年に贈呈する大小曆の類のようである。田山曆の流行を取り入れて毎年同じ趣向のものを作っていたらしい」(『南部絵曆を読む』岡田芳郎 大修館書店 2004年)、と紹介されています。

## ■平賀源内、秋田にあらわる

ところで、江戸で絵曆(大小曆)の大流行を生み出すのに一役買った平賀源内が、秋田藩の招きで大館のあたりまで来ているのです。大館といえば、鹿角とは

目と鼻の先です。なにか交流はなかったのでしょうか。

源内は、安永2年(1773)7月中旬から10月下旬まで3月ほど、院内銀山や阿仁銅山を中心に大館のあたりまで足を伸ばし、領内の産物調査を行っています。途中、角館の宿にあった屏風絵から当地の小田野直武の画才を見出し、西洋画の手ほどきをしたといいます。小田野直武は、源内を追うように江戸に上り、どうやら同居したようです。翌年には『解体新書』の附図を任されています。



『解体新書』附図「解剖図」  
(部分 小田野直武)

源内の来訪は、秋田領内に一大「知的衝撃」を巻き起こしたともいわれています。源内と田山との間になにかつながりめいたものがあれば、と「平賀源内秋田資料」(井上隆明)の中を探してみました。が、見えてくるのは強烈な源内の個性の生々しい姿と、短い生涯を駆け抜けた小田野直武の姿、そして多くの文化人の運命をも翻弄した寛政の改革という名の肅清の闇の深さばかりで、田山との関連は残念ながら見つけられませんでした。

### ■源内がだめなら、平秩東作は？

源内の盟友で戯作派の奇人、平秩東作も天明3年に蝦夷を目指して旅に出ています。田山を通過していないかと平秩東作の見聞録『歌戯帳』でルートを調べると、これも残念ながら福岡(二戸市)から五戸を通して浅虫にぬけています。

田山に関しては空振りでしたが、暦に関してちょっと面白い記事がありました。花巻に泊まったときの記事です。

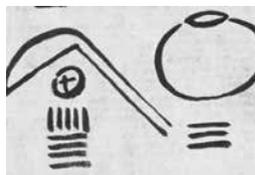
今夕、はなまき鈴木屋にとまる。はたご百七拾文づつにてやうやうとまる。奥州にて八至極のききんなり……

今夕とまりし鈴木屋に、天和年中よりの暦たくわへあり。二月十六日、八月十五日に月食あるとしは、翌年世の中あししと亭主はなし、暦を出しミする……<sup>ついで</sup>序に予が生まれとし享保十一丙午年をミる。予三月廿八日生れにて、心宿佳年……

やっとのことで泊めてもらった宿で飢饉の話になり、宿屋の亭主が、2月と8月に月食のあった年の翌年は世の中が穏やかでなかった、と保存していた暦を見せながら持論を展開するのです。天和年間といえば、西暦で1681~1683年。宿の亭主と話をしているのは天明3年(1783年)。つまり、この宿屋の亭主はざっと100年前からの暦を取っていたのです。となるとこの亭主の先代あたりからでしょうか。いったいどうして？何のため？亭主の暦に関する関心の強さも感じられ、興味を引く記事です。ついでに言えば、この記事から、謎だった平秩東作の生まれ年が判明したのだそうです。

### ■暦注は、実用的だったか？

暦は、種まきや田植えなど農作業の目安として、重要な役割を果たしていたといわれます。暦の勝手な発行が禁じられていた江戸時代、発行許可を求めて各藩などから幕府に提出された願文も、きまって、暦が行き渡っていなくて農事に差支えがでていることを理由に挙げています。



右：種まきよし  
左：田刈よし

暦には、二十四節気や節分、彼岸、八

十八夜、<sup>はんげしやう</sup>半夏生、土用などの太陽暦を反映した暦注があって、これらは農作業の目安としてよさそうです。ですが、農業において暦が果たした役割を強調するとき、往々にして、「種まきよし」(田山暦では種壺の絵)、「田植えよし」(苗束の絵)、「田刈よし」(鎌の絵)など直接農耕を指示する様な暦注に目がいかちのようです。これらは陰陽師系の幸徳井家で占った結果で、いってみれば迷信の類だということをお忘れではありません。しかも、全国共通の暦注ですから、東北地方にあてはまるものではありません。たとえば、天明3年11月14日(新暦だと12月7日)に種壺の絵があります。この時期の田山でいったい何の種をまけというのでしょうか。

別の問題もあります。たとえば、5月13日に苗束の絵があって「田植えよし」の日となっていますが、その日に田植えができるのでしょうか。苗の生育状況とか気温といったことばかりではありません。現代の小規模な兼業農家のように、田植え機を使って一日で田植えをしてしまふのとは違ったはずで、村びと総出で何日もかけてやったはずで、自分の田んぼの田植えだけ行えるはずがありません。では、5月13日の「田植えよし」は何を意味していたのでしょうか。

暦には、実際の農作業の目安だけではなく、なにか別の役割が求められていたと考えたほうがよいのではないのでしょうか。実用というよりはむしろ迷信も含んだ社会儀礼的なもの。自然というよりむしろ文化的なものといった方がふさわしいもの。そういったところから田山暦が生み出されたのではないかなと思って少しずつ勉強を始めたところです。

高校の教員から博物館に異動して1年半。研究ノートというより、むしろ空振りの記録です。無知に加え、誤解や思い込みもあります。ご指摘、ご教授お待ちしております。よろしくお願いたします。

## ■展覧会案内

## テーマ展 「大津波と三陸の生き物」

平成28年12月17日(土)～平成29年2月26日(日)

## 今も続く東日本大震災

2011年3月11日、三陸沖でマグニチュードMw9.0の大地震が発生し、続いて巨大な津波が東日本沿岸一帯を襲いました。この地震と津波は、死者・行方不明者18,451人(警察庁緊急災害警備本部2016)、建築物の全・半壊400,806戸(同)、直接的な被害額は原発事故に関わるものを除いても16兆円を超える(内閣府2012)、日本史上最大規模の災害を社会にもたらしました。

と、東日本大震災についてこのように客観的記述をすることには、実はまだためらいがあります。それは、私達にとって東日本大震災があまりにも大きな出来事であり、まだ過去になっていないことの証でしょう。事実、5年以上が経過した現在も、被災地は未だ復興の途上であり、状況は刻々と変わり続けています。

## 自然界への影響

東日本大震災を引き起こした地震と津波は、人の社会だけでなく、自然界、特に海辺の生き物にきわめて大きな変化をもたらしました。また、その変化が現在も進行中であることも、人間社会と同じです。しかし、人々の生活に関する報道と比べて、自然界に関する報道はごくわずかしかなりません。おそらく一般人には、津波によって海辺の生き物がどうなったか、そして5年9ヵ月後の今はどうなっているのか、ほとんど知られていないのではないのでしょうか。

そこで企画したのが、テーマ展「大津波と三陸の生き物」です。岩手県を中心とする三陸地方は、特に津波の影響の大きかった地域のひとつです。この展覧会では、大津波によって三陸の生き物に何が起き、そして今はどうなっているかを、最新の研究成果に基づいて紹介します。



回復したアマモ場とウミタナゴの幼魚 (片寄剛氏撮影2016年7月20日)

## 「三陸」とは

ところで、「三陸」という地名はどこからどこまでの範囲を指すのでしょうか。実は、その答えは必ずしも定まっていません。米地文夫氏は、「三陸」の地名使用の変遷について、初めは明治初年に陸奥国を五分割し命名したうち、三つの「陸」の付く国、「陸奥」「陸中」「陸前」の総称であったものが、明治29(1896)年の明治三陸津波、昭和8(1933)年の昭和三陸津波の報道などを経て、これらの激甚被災地であった八戸以南・牡鹿半島以北の地域を指す言葉になった、と結論しています(米地ら1994, 1995, 1997)。この展覧会では、米地氏らの定義にしたがい、「八戸市鮫角から石巻市万石浦までの、北上山地が太平洋と接する範囲」を三陸海岸として扱うことにします。

## 大津波の影響と、回復する自然

2011年3月11日の地震と津波は、三陸の海底から内陸までの地形を大きく変え、そこにすむ生き物に甚大な影響を

与えました。数多くの研究者や愛好家が、生物に対する津波の影響とその後の変化を調べるため、2011年の夏頃から調査を開始しました。本展では、そうした調査研究によって明らかになったことを、標本や模型、写真を用いて解説します。ここではその一部を紹介しましょう。

三陸では、津波によって海底の砂泥がかき回されたことにより、しばらく海水に濁りが見られました(山本ら2012)。また、陸上にあった施設から出た石油や様々な化学物質が海中に流れ込み、水産物への影響が心配された時期もありました。しかし2011年の冬までには水質がほぼ回復したと報告されています。また、湾の底に溜まっていた泥が流され、津波の前より環境が良くなった場所もあることが分かりました(神山ら2014)。

海岸近くの浅い海底は、津波で激しくかき回されたため、そこに生えていた海藻類やアマモ類の群落は砂ごと流され、一時はほとんど消失した場所もありました(Komatsu et al. 2015)。しかし、

早くも2011年の夏には、残った根や種子から新たな芽が出て、回復が始まりました。現在では、地震の前より広いアマモ場ができた場所もあります（片寄ら、未発表）。

海藻やアマモの茂る「藻場」や「アマモ場」は、多くの稚魚が生活する「ゆりかご」でもあります。浅海から海藻やアマモが消えた2011年の春には、岸辺に魚の姿はなく、海藻を食べるウニや二枚貝類などの動物も減りました。海藻やアマモの復活にしたいが、動物も少しずつ戻ってきましたが、回復の様子は種によって異なり、そこには複雑な仕組みが働いているようです。

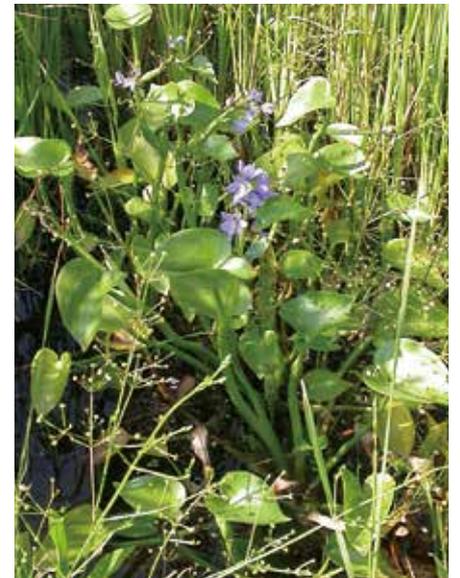
遠浅の浜の波打ち際には泥が堆積して干潟ができます。三陸海岸はほとんどが岩礁のため、大きな干潟はありませんが、それでも津軽石川（宮古湾）や鶴住居川（大槌湾）、織笠川（山田湾）などの河口では干潮になると干潟が広がり、大津波の前にはアサリやハマグリ、巻貝、カニ類、ゴカイ類など様々な動物を見ること

ができました。津波はこうした干潟の生き物をも押し流し、2011年夏の調査ではほとんど消失した状態でしたが、その後、浮遊性の幼生時代をもつ種を先頭に、海流に乗って少しずつ生き物が戻ってきました（松政ら2015）。

#### 陸の生き物へのダメージ

干潟と同様に、三陸海岸では砂浜の面積はもともと大きくありませんでした。三陸南部では地殻変動によって最大で1mを超える大きな地盤沈下が起き（国土地理院2011）、さらに大津波によって大量の砂が流失したため、砂浜の面積が大幅に減少しました（島田2014）。陸前高田市の高田松原や釜石市の根浜のように、ほとんど消えてしまった砂浜もあります。そこにはハマボウフウやハマニガナなどの植物や、砂浜特有の昆虫がすんでいましたが、津波後は数が激減しました。一方、北部の砂浜では面積はあまり変化せず、津波で消失したように思われた植物も、残った根や種子から芽が出て、現在では数が回復しつつあります。

津波は海岸から数キロメートル離れた内陸まで押し寄せ、農地や池などの土を激しくかきみだしました。そこにあった植生は全て消え、新たに違う植物がたくさん生えてきました。川の水や雨水が溜まって湿地となった場所では、ヨシやガマなどのほかに、珍しい水草が多数見つかり、人々を驚かせました（鈴木2016）。これらは、土の中に数十年間も眠っていた種子が、津波によって地上部へ現れ、発芽したものと考えられています。



津波後に復活した絶滅危惧種ミズアオイ

こうした調査によって、大津波が生き物に与えた影響の大きさが明らかになるとともに、生き物の予想外の回復の速さ、したたかさも分かってきました。

展覧会ではこの他に、磯の生き物や、海と川を行き来する魚に関する興味深い調査結果や水産業への影響、また昭和三陸津波など過去の津波の後に行われた生物調査についても紹介します。さらに、現在海岸で行われている大規模な復興工事が、回復しつつある生態系に与える影響について取り上げます。

（専門学芸員 鈴木まほろ）



7万本のマツが消失した高田松原（2013年8月16日撮影）

## ■事業報告

## 第72回自然観察会「夏山で生きもの探し」

開催日 平成28年7月24日(日)

昨年に引き続き、今年も盛岡市外山森林公園で自然観察会を行いました。開催場所は同じですが、昨年は6月末、今回は7月末と一か月も時期が違くと、見られる昆虫や植物はだいぶ異なっていました。自然観察では色々な場所に行くのも良いのですが、身近な場所をホームグラウンドにして、年間を通しての生物相の変化を観察するのも興味深いものです。そんな意図もあり、あまり遠出せずに気軽に楽しめる場所を観察地を選んでいきます。

夏休みに入っすぐということもあり、今回は親子連れが多く、スタッフを含め総勢27名のうち10名が小学生でした。始まる前から真新しい網を振り回す子供たちで大変にぎやかで、元気の良い観察会になりました。

今回の観察会は「生きもの探し」として、昆虫に限らず、鳥獣類や植物など、とにかく色々な生きものを探して楽しもうというテーマで開催しました。子供たちはカブトムシやクワガタムシを捕りたいのだと思いますが、生物の多様性にも興味を持ってほしいと思い、普段は気に留めない小さな虫、例えばゾウムシやコメツキムシ、それからクモなども見つけて、面白さを知ってもらうことをもう一つのテーマとしました。講師には今年も、当館研究協力員で元岩手県農業試験場研究員の千葉武勝先生にお願いしました。

出発前の集合場所では、ヤマオニグモ



講師の千葉武勝先生

が長く張った橋糸の上をまるで空中を歩くように渡っており、さっそくクモの網の張り方や生態を解説することができました。昆虫は好きでも、クモはダメという方も多いのですが、今回集まった皆様には興味をもって観察していただけたようです。

出発地点の駐車場から少し下ったところにある池の周りは、様々な生きものが見つけられるポイントで、子どもたちは虫とり網を池の中に入れて何が取れるか探ってみたり、カエルを捕まえようとしていました。私が子供のころは、補虫網で水をすくうとすぐに網が壊れたものですが、今はずいぶん生地が強くなりました。



なにがとれるかな？

池を過ぎたあたりから、ゆっくり進む大人のグループと、どんどん先に進む子供たちのグループでだいぶ隊列が離れてしまい、見つけたものを全体に説明するというのが難しくなりました。これに合わせてスタッフもそれぞれに別れ、見つけたものをその場にいる人に紹介する方式で説明を行うことで、皆様の興味にあわせた解説ができたように思います。

午後は山道を通るアップダウンのあるコースで、雰囲気は自然観察&虫捕りの会から、すっかり山歩きの会のようになりました。ここでも、先頭に行くハイペースのチームと、ゆっくり植物を見るチームに別れ、思い思いに山道の散策を楽し

んでいただきました。

コース最後の坂を下りたところに、サラサウツギやアジサイが植えられた場所があり、花にはトラマルハナバチやクマバチが飛び交っていました。ぶんぶん羽音が聞こえると怖くなるものですが、これらのハナバチは、手で捕まえたりしない限りほとんど刺すことはないことを説明し、じっくりと観察していただきました。

これらのハチ類は手づかみしませんが、観察会で子供たちに虫を解説するときは、捕まえた虫をできるだけ手で持って見せるようにしています。よく観察するためには遠くから眺めるだけでなく捕まえてみることも、そして手にとって細部を見るとよい、というメッセージです。また、汚いものや危険なものではないのだと伝えるためにも、あえて素手でつかんでいます。普段、調査で採集するときは、つぶれたり脚が取れてしまわないようにほとんど手ではあつかわないのですが、この日は特別です。

今回手づかみした中で一番の大物は、体長2cm(脚を含めれば7cm以上)のヤマオニグモでした。このサイズのクモを素手で扱うのは初めてでしたが、思ったより体がしっかりしていて持ちやすいものでした。うっかり手を噛まれましたが、ごく一部の例外を除いてクモの毒は人には効かないという解説のよい機会になりました。

この他、刺す虫の例としてクロサシガメをつかんで尖った口器を見せたり、独特の酸っぱいにおいがすることを教えたりと、すこし変わった体験を提供できたかと考えています。

さわやかな夏空の下、熊にも遭わず、無事生きもの探しことができました。身近な生きもの多様性を感じていただけたなら幸いです。(学芸調査員 渡辺修二)

## ■活動レポート

## インターネットを利用した博物館の情報発信

少し前に「ポケモンGo」という無料ゲームのことが大きな話題になりました。このゲームアプリ（ソフト）を入れたスマートフォンやタブレット端末を持って街を歩き、特定の場所に近づくと、画面上に「ポケットモンスター」のキャラクターが現れます。それを捕まえて、他の人の捕まえたモンスターと戦わせて遊ぶゲームです。珍しいモンスターが出現する公園に大勢の人が集まったことや、ゲームに夢中になって交通事故を起こしたことがニュースになりました。実は当館の正面にも、ポケモンを捕まえるためのボールが手に入る「ポケスポット」がありますし、時々には館内にモンスターが現れることもあるようです。

さて当館ではこの春、ポケットモンスターならぬ「ポケット学芸員」という無料のアプリを展示に導入しました。来館者がスマートフォンにこのソフトを入れて、展示資料の横にある札の番号を入力すると、その資料の補足説明や動画・音声などが再生される仕組みです。例えば、いわて自然史展示室にあるクマゲラの剥製の番号を入力すると、クマゲラの3種類の鳴き声を聴くことができます。これから楽しい展示情報をもっと増やしていく予定です。ぜひ一度、お試しください。

このほか、インターネットを利用した新たな情報発信手段として、1月からFacebook（フェイスブック）に当館のページを立ち上げました。現在は、開催



ポケット学芸員については受付で！

中の展览会のみどころや、速報的なイベント情報などを流していますが、だんだん内容を充実させる予定です。ツイッターと合わせて、博物館の情報入手にぜひ御利用下さい。

(学芸第二課 鈴木まほろ)

## ■活動レポート

## 平成28年度考古学セミナー

今年度の考古学セミナーは、9～12世紀に存在した山岳寺院・国見山くにみさん廃寺はいじ（北上市）にスポットを当て、9月11日（日）に当館にて講演会を、17日（土）に現地にて見学会を開催しました。講師にお招きしたのは、国見山廃寺跡の発掘調査を長年にわたって務められてきた当該研究の第一人者、北上市立博物館館長補佐

の杉本良先生です。

講演会（69名聴講）は「俘囚ひしゅうの大成院 国見山廃寺」と題し、国見山廃寺の成り立ちと胆沢城の関係、そしてその後の発展・衰退が阿倍氏、清原氏、奥州藤原氏の盛衰とどのように関係しているか、発掘調査成果から明らかになった堂塔のあり方や年代観を比較しながら精細

に論じていただきました。

現地見学会「国見山廃寺を歩く」は、募集開始翌日に定員（20名）を超過する盛況振りでした。杉本先生の詳細かつ楽しい解説を伺いながら堂塔跡を巡り、往時の風景が自然と頭に想像される充実した2時間となりました。

(学芸第三課 丸山浩治)



講演会の様子



現地見学会の様子



# 岩手県立博物館

IWATE PREFECTURAL MUSEUM

## インフォメーション (2016.12.1~2017.3.31)

### お知らせ

#### ●展示室の一部休止と年末年始の休館について

年末年始は12月29日(木)から1月3日(火)まで休館します。

いわて文化史展示室は秋の展覧会会場として使用するため、平成28年12月19日(予定)まで通常の展示をお休みします。

### 展覧会

#### ◆テーマ展「大津波と三陸の生き物」

平成28年12月17日(土)~平成29年2月26日(日)

2階 特別展示室

2011年3月11日の大津波が起きる前、三陸の海辺にはどんな生物がいたのでしょうか。大津波によってどんな影響を受け、今はどうなっているのでしょうか。あの日を境に大きく変化した三陸の生き物と海辺の風景を追いかけます。

#### ■展示解説会 各回14:45~15:30

- ①12月18日(日) ②1月9日(月・祝) ③1月15日(日)
- ④1月28日(土) ⑤2月5日(日) ⑥2月11日(土・祝)
- ⑦2月25日(土)

#### ■日曜講座 当日受付 聴講無料 各回13:30~15:00

- 12月25日「繰り返し訪れる津波と三陸の自然」  
鈴木まほろ(当館学芸員)
- 1月8日「大津波と三陸の海と河口の動物たち」  
松政正俊氏(岩手医科大学教授)
- 1月22日「岩手県の砂浜の現状と海浜植物の保全対策」  
島田直明氏(岩手県立大准教授)

#### ◆テーマ展「絵画でたどる19世紀岩手の風景」

平成29年3月18日(土)~平成29年5月7日(日)

会場 2階 特別展示室

江戸から明治へと時代が移った19世紀は、武士の世が終わり、西洋の文物が流入し、人々の暮らしが劇的に変化した時代です。岩手県が誕生し、鉄道が通り、日常の風景も変化しました。大政奉還から150年。江戸の面影と明治の鼓動を伝える絵画をととして、19世紀のふるさと岩手の風景に思いを馳せます。

#### ■展示解説会 各回14:30~15:00

- ①3月20日(月・祝) ②4月8日(土) ③4月22日(土)

#### ■日曜講座 当日受付 聴講無料 13:30~15:00

- 3月26日「川口月村の『奥羽寒図記』(仮) 斎藤里香(当館学芸員)

### 冬の写生会

写生会 12月17日(土)~1月15日(日) 幼児~小学生対象

展示会 1月21日(土)~2月12日(日)

博物館からの景色や展示資料をお絵かきしましょう。(クレヨンや色鉛筆をご持参下さい。)

### 県博日曜講座

第2・第4日曜日 13:30~15:00 当日受付 聴講無料

当館学芸員等が岩手の文化や歴史、自然について解説します。

#### \*展覧会関連講座

- 12月11日「魂の行方」 小野寺俊彦(当館学芸第二課長)
- \*12月25日「繰り返し訪れる津波と三陸の自然」  
鈴木まほろ(当館学芸員)
- \*1月8日「大津波と三陸の海と河口の動物たち」  
松政正俊氏(岩手医科大学教授)
- \*1月22日「岩手県の砂浜の現状と海浜植物の保全対策」  
島田直明氏(岩手県立大准教授)
- 2月12日「考古学者がやっていること」 金子昭彦(当館学芸員)
- 2月26日「発掘調査から出土資料が展示されるまで」  
小山内透(当館学芸第一課長)
- 3月12日「絵馬の世界~東北の絵馬を訪ねて~」  
近藤良子(当館学芸員)
- \*3月26日「川口月村の『奥羽寒図記』(仮) 斎藤里香(当館学芸員)

### 週末の催し

#### ◆ミュージアムシアター

毎月第1土曜日 13:30~15:00頃 前後 講堂 当日受付 視聴無料

12月3日「冬休み直前クリスマス特集」(85分/アニメ/幼児~)

神様がくれたクリスマスツリー 年神様とお正月

きもだめしのぼん くるみ割り人形 三匹の子ぶた

1月7日新春むかし話特集(66分/アニメ/幼児~小学生向け)

すずめどんのおにたいじ いっすんぼうし

うしわかまる したきりすずめ ゆきおんな

2月4日春待ち映画(107分/ドラマ/一般向け)

サクラサク

(父親の病気がきっかけで家族の大切さに気づくおはなし)

3月4日3.11特集(65分/小学生~一般)

みんな生きている 3.11 東日本大震災から学ぶ

もし今、地震が起きたら

地震・津波から生き延びる 正しい知識と行動

#### ◆チャレンジ!はくぶつかん

毎月第2・第3土曜、日曜、祝日 小学生向け 随時受付

チャレンジ!マークをさがして はくぶつかんをたんけん!

12月10日・11日・17日・18日 テーマ:白

1月14日・15日・21日・22日 テーマ:鳥

2月11日・12日・18日・19日 テーマ:三陸

3月11日・12日・18日・19日・20日 テーマ:絵

#### ◆ミュージアムコンサート〜クリスマスの音楽会

12月24日(土)13:30開場 14:00開演 講堂

出演団体 トリオ・ヴィオレ

金管楽器とピアノ演奏による親子で楽しめる音楽会です

#### ◆たいけん教室~みんなためそう~(事前申込制)

毎週日曜日 13:00~14:30 幼児(保護者同伴)・小学生20名程度

さまざまな遊びやものづくり、実験を体験してみましょう。

※4月から全プログラム有料となりました(材料費代/プログラムごとに異なります)。

※要事前申込み。開催日の1週間前の日曜日から電話または博物館で開館時間(9:30~16:30、休館日を除く)に先着順に受け付けます。1

度に3名まで予約可能です。予約状況・材料費代はホームページでご確認ください。

12月	4日 まゆで干支づくり(西)	1月	1日 お休み
	11日 オリジナル卵をつくる		8日 みずきだんご
2月	18日 かんたん門松づくり	3月	15日 ほかほかカイロ
	25日 たこづくり		22日 石のオリジナルはんこ
			29日 手づくり万華鏡
	5日 スライムであそぼう		5日 まが玉アクセサリー
	12日 土器づくり		12日 化石のレプリカ
	19日 おひなさまづくり		19日 石から絵の具をつくる
	26日 おひなさまづくり		26日 こはくの玉づくり

### 冬のワクワク!ワークショップ

12月23日(金・祝) 対象:幼児 当日受付

受付時間 9:45~11:30,13:00~15:00 材料費各100円

### 定時解説

平日~土曜日 13:30~14:30/日曜日 10:30~11:30

解説員が常設展示室をご案内します。そのほかにも随時、解説員が皆様のご質問や解説のご要望におこたえています。

※他の館内イベントとの兼ね合いでお休みする場合があります。

### 利用のご案内

岩手県立博物館だより 第151号 平成28年12月1日発行	編集 岩手県立博物館 〒020-0102 盛岡市上田字松屋敷34 Tel. (019)661-2831/Fax. (019)665-1214
	発行 公益財団法人岩手県文化振興事業団 〒020-0023 盛岡市内丸13-1 Tel. (019)654-2235/Fax. (019)625-3595